



法学部50周年記念シンポジウムにて、  
ご講演される小田 滋先生。

# 會報

東北大学法学部同窓会

第 27 号  
発行所  
東北大学法学部同窓会  
980- 仙台市青葉区川内  
8576 東北大学法学部内  
Tel・Fax 022-217-6181  
発行日  
平成12年6月20日  
印刷所  
今野出版企画株式会社

## 川内だより

会長 大西 仁

今回、法学部長・法学研究科長に再選され(再任の任期は一年間)、同窓会会長も本年度末までお引き受け致すことになりました。これまで二年間、同窓会会員の皆様からは暖かいご支援を賜りましたが、引き続きもう一年間よろしくお願い申し上げます。

最近の動きをいくつかご紹介申し上げますと、まず、本年三月に、西洋法制史の小山貞夫教授が停年をお迎えになり、四月より名誉教授になりました。長年にわたり本学部のためにご尽力頂いたばかりでなく、副総長や付属図書館長をお勤めになるなど、全学のためにもご指導賜ったことを深く感謝申し上げます。

一方、四月には、行政法の稲葉馨教授、民事訴訟法の貝瀬幸雄教授、政治過程論の田口左信助教授がそれぞれ着任になりました。

次に、現在進行中の本学部・研究科の改革についてご報告申し上げます。

昨年の『会報』でも既に若干ご報告致しましたが、本年度から本学部・研究科の組織・カリキュラムが大きく変わりました。第一に、大学院重点化が行われ、組織の本拠が学部ではなく大学院に置かれることになりました。より具体的には、これまでは、東北大学法学部に付属して東北大学大学院法学研究科が置かれていたのが、本年度からは逆に、法学研究科に法学部が付属することになり、教官も事務職員も法学研究科所属ということになりました。(したがって例えば、法学研究科長の方が主で、法学部長は副次的に兼ねるという形になりました。)

第二に、学部の学生定員を一年二五〇人から二〇〇人に減らす一方、大学院の学生定員は、修士課程で一年五〇人から六二人に増やしました。これによって、法学部でも、工学部や理学部のように、かなりの割合の学生が大学院に進学して高度の専門知識を学ぶ体制が整いつつあります。

第三に、このような組織の改編と平行して、学部四年間と修士課程二年間を一貫したプログラムに組み立てた「選択的六年制カリキュラム」

が本年度からスタートしました。

第四に、「実務家」を教官にお迎えして、大学院と学部双方で高度専門職業人養成を主目的とする講義・ゼミがいくつか開設されるようになりまし。例えば、前に挙げた田口助教授は通産省から二年間の予定でご出向頂いていますし、本年七月には、公正取引委員会の平林英勝氏が経済法担当の任期付教授として、大蔵省の楠(す)壽晴氏が現代日本行政論担当の任期付教授として、それぞれご着任の予定です。その後も本年度から来年度にかけて、他の省庁から任期付教官をお迎えすることが計画されています。さらに本年度後期から、複数の弁護士・元裁判官を講師にお迎えして、民事裁判演習を開設することになって居ります。

今後の計画についても少し触れておきますと、大学院は「日本版ロースクール」の開設も視野にいれながら、ますます拡充に努めるつもりで居ります。なお、昨夏以来、テレビ・新聞・雑誌等で、本研究科が「ロースクール化」にいち早く取り組んでいるとの報道が度々なされていきますが、現在はまだ、「日本版ロースクール」(法科大学院)の制度をどうすべきかが司法改革審議会を中心に審議されている段階です。したがって本研究科としては現在、将来のロースクールでは、どのような教官がどのような学生に対し、どのような内容の教育を、どのような目的・方法で行うのがよいか等、主として中味の検討・試行を鋭意進めているとこゝろです。

学部につきましては、今後も少人数教育を徹底していく予定です。既に本年度から、一年次のひとりひとりの学生に勉学上の助言を与える教官がつく「アドヴァイザー制」が実施されていて、これも、テレビや新聞で何度か取り上げられています。

昨年一〇月一五日に仙台国際ホテルで開催された「東北大学法学部五〇周年記念シンポジウム・祝賀会」については、五〇周年記念事業実行委員長の水町助教授がご報告申し上げますので、ここでは極く手短かに触れるにとどめますが、シンポジウムは充実した内容のものが実施でき、祝賀会も大変になごやかな集いを催すことができました。特に祝賀会では、石原俊同窓会副会長が力強く乾杯の音頭をおとり下さり、参列者に感銘を与えました。最後になりましたが、同シンポジウム・祝賀会開催にあたり、東北大学法学部同窓会と東北大学法学部同窓会学術振興基金

から多大のご援助を賜ったことを深く感謝申し上げます。

(五月二九日記)

## 法学部五十周年記念シンポジウム・ 祝賀会の開催報告

準備委員長・東北大学助教授 水町 勇一郎

東北大学法学部は、昭和二十四年(一九四九年)に法文学部から分立して以来、平成十一年(一九九九年)で五十周年を迎えました。

このことを祝し、本学部では、平成十一年十月十五日、仙台国際ホテルにおいて、五十周年記念シンポジウムおよび記念式典・祝賀会を開催致しました。

午後一時三十分から行われた記念シンポジウムでは、本学部の歴史と伝統を回顧しつつ二十一世紀の法学・法学部のあり方を展望するという趣旨の下、「変容する世界と法の精神——二十一世紀における法学の役割——」を統一テーマに、世界的にご活躍されている小田滋(国際司法裁判所判事・東北大学名誉教授)、ハンス・ケルン(トヴィツヒ・シュライバー)教授(ゲッテンゲン大学教授・同大学前学長)、樋口陽一(上智大学教授(当時)・東北大学名誉教授)の三先生からご講演をいただきました。最

初にご講演いただきました小田先生は、五十年前に法文学部から分立した新制法学部の最初の人事で本学部に就任された先生であり、その後「国際法教授」として本学部の自由な学風の中で過ごされた「二十五年」と、ハーグの国際司法裁判所で「国際裁判官」として「みずからの手で国際法の生成」に携わってこられた「二十五年」を振り返りながら、「机上の、欧米の著述を紹介するという学風に染まらず、生きた国際法を自分の頭で考える」という「生きた法学」の重要性について、世界を代表する国際法学者・裁判官としてのご経験に裏付けられたダイナミックなお話しをいただきました。ヨーロッパを代表する法哲学者の一人であるシュライバー先生は、ヨーロッパでの法学を取り巻く環境の急速な変化や、ゲッテンゲン大学前学長として国際的な研究交流に携わられてきたご経験を踏まえ、



乾杯の音頭をとられる石原 俊  
同窓会副会長

「グローバル化した世界」における法学の機能・役割の変化、特に「従来のような法適用学に限定されるのではなく、法発展学となり、その活動領域を拡大していく」「学問としてのグローバル化」の必要性、そのための国際研究交流の重要性について、深くかつ広い視点からご講演いただきました。なおシユライバー先生のご講演は西谷祐子助教授の日独同時通訳を通じて行われました。最後にご講演いただいた樋口先生からは、近年盛んになっている「近代」批判、「近代」への懐疑」という論調に対して、「近代」に意識的にこだわってきた東北大学法学部の学風」に触れながら、「簡単に『近代』を手放そうとする」ことへの鋭い批判、特に「人間社会が紆余曲折

を経てたどり着いた知恵」である「人権」と「国民主権」という近代的価値そのものを捨て去ることによって非理性的・非人間的な世界へと戻ってしまうことの悲劇・危険性が語られ、世界を代表する憲法学者としての深い洞察に支えられたお話しをうかがうことができました。三先生のご講演の後、本学部の藤田宙靖教授から、東北大学法学部の「伝統」を振り返りつつ「未来」を展望するコメントがなされ、三先生からいただいたご意見・ご提言を総括しながら、本学部が今後進むべき方向・改革の指針についての意見が述べられました。なお、これらのご講演・コメントの内容は、東北大学法学部外部評価報告書「変容する世界と法の精神——二十一世紀における法学の役割——」として公表されています。

シンポジウムに引き続き午後五時から行われた記念式典・祝賀会では、大西仁学部長による式辞に続き、阿部博之東北大学総長、佐藤慎一文部事務次官、石原俊同窓会副会長からそれぞれご挨拶・ご祝辞が述べられました。特に、石原副会長による乾杯のご挨拶では、ご自身の法文学部時代の学生生活を回顧しながら、「今後も社

支 出

会 議 費	7	
事 業 費	2,000	法学部50周年記念 シンポ賛助
事 務 費	476	募金費用
通 信 費	158	募金費用
計	2,641	

収 入

寄付金(大口)	5,800	飯塚氏より
寄付金(同窓生)	4,826	209人
計	10,626	

差引収入超 7,985  
期末繰越金 9,736

(以上単位千円)

## 同窓会学術振興基金だより

一、平成一一年度の収支決算概要は次の通りです。

会に役立つ立派な人物を数多く送り出し続けるように」という本学部への力強いエールが送られました。また、祝賀会では、東北大学交響楽団による演奏や資料展示による法学部の歴史紹介も行われ、活気あふれる雰囲気の中で盛大に本学部の五十周年が祝われました。

シンポジウム、式典・祝賀会ともに、同窓会の皆様をはじめ、法曹界関係者、大学関係者など三百名近い方々が参集され、この種の大学のお祝いでは他に例がないほど盛況ななかで本学部の「五十年」の区切りをお祝いすることができました。本会の開催にあたって多大なご支援をいただいた同窓会および同窓会基金の皆様、および、会員の方々へのご連絡や当日の受付等でご尽力いただいた同窓会事務局の皆様には、この場をかりて心から御礼を申し上げます。

二、同窓生の皆様に協力をお願いした募金の状況は、二〇九人、四、八二六千円(平成一二年三月三一日現在)という数字になりました。

東北大学研究教育振興財団があるのに、その上に法学部同窓会基金が必要なのか、今一つ同窓生の皆様に理解が得られにくい事情もあると受け止めてはおります。しかし、平成四、五年にかけて、同窓生の中から、『同窓会基金が必要素だ』との声が起り、それが同窓会としての動きにまでなったという経緯に想いをいたし、又主要目的とする『研究助成』の成果は、速やかに、かつ、はっきりとした姿で、目には見えにくいものではありませんが、それ故にこそ同窓生の皆様のご支援に頼るにふさわしい事業ではないかとも思う次第です。



## 随 想

正 木 宏 生

募金未了の同窓生の皆様には、どうか平成一一年一二月にお送りした募金のお願ひ書(会員名簿に同封、又は封書によりお手許に)を再度ご覧下され、ご協力を賜りたく重ねてお願い申し上げます(平成一二年九月末日を一区切りといたします)。

三、平成一二年より、主要事業である『研究助成』にウエイトを置きます。

助成対象を一二例示しますと、①学会等に於ける研究発表に要する費用 ②入手が容易でない文献の入手費用 ③研究成果を活字にする費用等になります。

同窓会事務局に申請用紙を備えて付けておりますので、ご照会下さい。

以上  
(基金事務局 小野寺健三郎)

てやってきました。

日本列島はなんと縦に長いんだらうとゆうのが、その時の印象で

した。当時は教養学部が元の幼年学校であった西多賀にあり、その関係で宮沢橋の下宿でお世話になる事になった。校舎は木造で廊下を歩くとギンギンときしむ事と桜が見事であった以外は特に記憶にはない。時には広瀬川でボート漕ぎを楽しむといったのんびりした余暇を過ごした良き時代であった。

さる等米ソ対立の激化等不安定な状況であったが、国内では神武、岩戸景氣で就職戦線も現在の不況に比べ誠に恵まれた経済環境にあった。

その後片平丁の学部に移った関係で下宿も北一番丁、半子町と代わり、新興地と旧住宅地を満喫出来た。

当時法学部は、憲法の清宮教授、刑法の木村教授、民法の中川教授、刑事訴訟法の鴨教授、国際法の小田教授、商法の服部教授、労働法の外尾教授、等々錚錚たる先生がおられ法学部の黄金時代であった。卒業後は民間企業に就職を希望していた私には、学期末の試験に勉強する程度で諸先生の警咳に触れる事もなく文字どおり猫に小判の感であったが、仙台の四年間は、親元から遠く離れてのはじめの生活でもあり、又生まれ育った関西とは違った厳しい気候条件での生活等、いろんな意味で勉強になった。

私は父が造船所に勤務していた関係で、小さい頃から進水式などを実際に見る機会も多く、大きくなったら船に関係する事に就きたいと考えるようになっていた。造船業は船舶の製造業であり技術屋が主体の企業でもある事から就職するなら、国境を越えて七つの海を股にかけて船舶を運航する海運業に入りたいたいと考えようになった。

資源を持たない日本では加工業が繁栄する為には海外から原料を安く輸入出来るよう海運業が競争力をつける必要ありと考え油槽船を主力とする日東商船に入社した。

当時も海運会社は定期船の運航を主力とする大手海運会社があったが、定期航路の営業では面白くないと勝手に判断し、規模が小さくとも遣り甲斐のある海運会社で働きたいと思っていた。

卒業する昭和三五年は国際的には、前年にキューバ革命が起り、翌年にはベルリンに東西の壁がで

念願適って入社した会社ではあったが、最初に配属されたのは購買部であった。多くの新入社員が営業に配属されるなかで、自分だけが管理部門で仕事をする事に

なり、事志と違った仕事で随分気が減入った記憶がある。

当時は阪神は地震も比較的少なく、亡くなった母から東京に転動する際に神戸と違って東京は地震の多いところ充分注意するよう言われた事を記憶している。先の阪神大震災のニュースを聞いてその事を思い出し誠に感無量の思いであった。

四年間の神戸支店での勤務を終え、念願の東京本社での不定期船舶に配属され、主として北米材の業務に携わる事となった。

国内の材木は価格の点で競争力がなく、住宅に使用される用途で北米太平洋岸から米材の輸入が盛んであった。

往路にはアラスカ向けのパイプを鉄鋼会社から請負復航に丸太を積むため一万五〇〇〇トン級の木材専用船が盛んに運航されており、文字どおり不定期船舶部門のドル箱であった。最盛期には船腹不足の為、五万トン級の船舶をロンドン、ニューヨーク市場から用船し忙しいがやりがいのある毎日を夢中で過ごした事がなつかしく思い出される。

政府主導の合併によりジャパンラインとなっていたが業界一、二を争う木材専用船の運航会社であ

り、航海毎に収支が明確にされ、会社への収益の寄与度が明確で生き甲斐を感じていたが、造船技術の進歩により建造期間が大幅に短縮され、ブームの期間が短く好況が比較的短期間に終わる傾向と強力な海員組合の度重なる賃上げによる人件費の高騰が無視できない状況にあった。

その頃義父が自動車部品業を営んでいたが、自動車産業の発展により、事業拡張のため、転職を熱心に勧められ大会社から中堅企業への転職に踏み切る決心をした。

サービス業から製造業への転職で不安もあったが、三六歳、一から出直す覚悟を決めた。

三年後、米国の部品メーカーと合併でオートマチックのクラッチを製造する会社に向向することになり、北海道の千歳市の現住所にある新工場に赴任した。

当時はオートマチックの普及率も七〇程度現在の八五％とはほど遠く従って操業開始も五名からとまことに心細い出発ではあった。

爾来二六年の月日が経過し、現在資本金五億円従業員数五百名で、千歳と苫小牧に工場があり、海外はアメリカのバージニア州に二百名の工場とビック3の本拠地のデトロイトに営業拠点と中国の上海

に工場を持つまでになった。お客様も国内のすべての自動車メーカーに加え、海外はGM、FORD、BENZ、OPEL、VW、およびVOLVO等殆どの自動車メーカーに納入している。誠に今昔の感あり。

その間、北海道に立地した事により優秀な技術者にも恵まれ、本学工学部の先生、先輩及び後輩の支援で国内有力メーカーにも念願の納入を果し、自動車産業の隆盛にも恵まれ国内シェア一六〇％世

界では約三五％、年間一億二千万個のクラッチを国内で製造するまじになった。

現在はご承知のとおり自動車業界では世界的な規模で合併吸収が目まぐるしい動きあり、やがて部品業界にもその波が押し寄せてくるものと思われる。

現在はアメリカ工場の黒字化と海外のさらなる展開による客先のサービスの向上に頭を悩ます今日この頃ではある。

(昭和35年卒・株ダイナックス社長)



## 仙台幻想

大石 眞

一 いま私は古都に住んでいるが、もともと九州は宮崎県の田舎生まれである。一九七〇年(昭四五)三月始め、受験のため、初めて関門海峡を経て関ヶ原、箱根の関を通り、白河の関を越えてようやく仙台駅に着いた。これだけの長旅は、むろん初めてである。

というのも、進学校だった出身高校では、修学旅行の制度はあったものの、大学進学希望者はみな

いずれ関西か関東に行くことと決め込み、わざわざ修学旅行で遠方を訪ねるといふ感覚をほとんど持ち合わせていなかったからである。

南国で生まれ育った私が、仙台を選んだのは、一度は九州を出なくてならぬという三四郎の心意気に感じ、トンネルを抜ければ雪国だったという寒冷地の風情に惹かれたからでもあるが、見知らぬところの身を置いて一からやり直

したいという内面的な動機があったことが一番大きい。思えば遠くへ来たもので、まさかここで十年近くを過ごそうとは、夢にも思わなかった。

学生時代は、当時全国の大学を覆った紛争の余熱で騒然とした中で過ごした。これに批判的な私には精神的な浪費も多く、はっきり言えば不快な日々だったが、それでも教養部時代は講義に出るより独りで思想史上の古典を耽読したり、一年分のドイツ語教本を一月で読了する代わり、授業はほとんど自主休講にしたりして、それなりに楽しんだことなど、同期の学友の姿とともに思い出される。

錚々たる陣容による専門科目が並ぶ学部の講義では、さすがにそんなことは通用しなかったが、ゼミは、ドイツから帰国されたばかりの青井秀夫先生の法理学、莊子邦雄先生の刑法、そして宮田光雄先生の政治学史に参加し、それぞれ個性に充ちた学問姿勢に接することができた。厳しかった反面、充実した毎週でもあった。

その後、行政法を志して大学院に入ったものの、若き藤田宙靖先生が——幸か不幸か——ちょうど在外研究中だったこともあって、ドイツ国法学の文献を読み進むう

ちに憲法学の方が面白くなり、今は亡き小嶋和司先生に相談し、思い切って「転向」した。今でこそ専門を憲法学としているが、学部時代は、春休み中、九州に帰省していたため、憲法ゼミの募集に気がかず、入りそこなったので、多少なりとも憲法学の研究らしいことを始めたのは、この辺りからということになる。

その後、教壇に立つため二七歳半ばで仙台を離れ、東京に九年、千葉に二年、そして福岡に三年と移り住んだが、思いもよらなかつた京都に家を構えて、はや八年目を過ごそうとしている。大学という職場がなければ、さしずめローリング・ストーンといったところだが、こう歩んでくると自分の原点を確かめたい気持ちになるから、年齢とは思議なものだ。

二 この四月の末、十数年ぶりに仙台を訪ねた。短い滞在だったが、いろいろなことを考えさせられた三日間だった。

伊丹空港から到着したその夜、早速、かつてよく通った国分町の小さなライブハウスにおもむいた。思いもかけず懐かしい面々と再会できて嬉しかったが、街並みが一新したのはまだしも、一番町で若者たちが大勢たむろしている

光景には、正直いって不快な驚きを覚えた。まるで渋谷のセンター街で、自分の居場所はもはやないと感じたが、考えてみれば、博多の親不孝通りも京都の河原町や木屋町通りも同じことで、仙台だけの問題ではないのである。

翌日午前、杜都にふさわしく快晴の空に新緑が映える青葉通りの広瀬川を渡ったところでバスを降り、花を浮かべた五色沼の脇を通って坂道を上り、城趾と角櫓を経て、記念講堂を右に眺めながら、法学部の研究講義棟のある文系学舎までゆっくり歩いた。道路は整備されていたが、狭く息苦しい感じで、いかにも歩きにくい。

これだけの緑豊かな敷地をなぜこういう風に造作しなくてはならないのかと不平を募らせながら進んで行くうち、空手の練習にいそしむ体育会系学生や遅い花見を車座になって楽しむ女子学生グループなどを見かけて、ようやく少し懐かしみを覚えてきた。趣のある建物の多かった片平丁の階段教室から平面的なビルが並んだだけの川内キャンパスへ移った時には、ずいぶんがっかりしたのだが、何といっても、学部、大学院、そして助手時代を通算して十年近くを過ごした馴れ親しんだ光景なの

である。

その日は休みだったこともあって、法学部の研究棟はひっそりと静まり返っていたが、定年直前に亡くなった小嶋先生の研究室を見上げた時は、さすがに言いようのない感傷が襲った。院生と助手で占める三階に昇り、五年間をほぼ独りで過ごした東奥の研究室に近付いた時も穏やかではいられなかつたが、パソコン機器が廊下にはみ出し、手狭になった空間には、どうしようもない違和感を覚える。自分は余所者だと思わせる厳とした何かが、ここにはあった。

しかし、人事は変わるのが定めで、かつて過ごした所に時空を超えたものを求めた私こそ、心得違いをしていたようだ。研究棟を後にし、再び城趾から大橋まで下つて広瀬川を覗き込んだ時、ふいに、中でもないが、あ、お前は何をして来たのだと、吹き来る風に問われた気がした。

夕方に開かれた総勢五〇人にする藤田先生還暦祝賀会は、しかし、それをまったく忘れさせる心暖まる集いであった。先生ご夫妻をお送りした後、新旧の仲間とともに深夜まで大いに談論したのはもちろんだが、不思議なことに、ここにはそれまで付き纏っていた違和

平成 10 年度 決算 概要

支 出

会 議 費	112	
事 業 費	764	会報印刷等
事 務 費	3,375	旅費、人件費 データ処理費等
通 信 費	1,347	会報、諸案内、 送料等
計	5,597	

収 入

会 費	5,428	
利 等	159	
計	5,587	

差引支出超 10  
次期繰越金 20,861  
(以上単位千円)

感がまったくなかった。そこに残ったのは、すでに大学に籍を置くかこれから研究で身を立てようという人ばかりで、普段着の自分

でいられたからである。悲しいことだが、すっかり狭い世界に入り込んでしまったらしい。  
(昭和49年卒 京都大学法学部教授)

同窓会本部だより

◎平成一一年度通常総会

総会は、一〇月一五日(金)午後四時四五分から、仙台国際ホテルに於いて、法学部五〇周年記念シンポジウム終了後、同祝賀会開催の間をぬって開かれた。議長は、大西仁会長が議長となり、次の通り進められた。

事務局長 小野寺 健二郎

I、平成一〇年度決算について 事務局長説明の後、原案通り承認。証明概要は左記の通り。

II、法学部同窓会学術振興基金が、同窓会より寄付を募る件 原案通り承認され、その後阿部純二基金理事長より感謝

と協力願いの挨拶が行なわれた。

於 仙台国際ホテル  
総会・懇親会

尚恒例の総会終了後の懇親会は、法学部五〇周年記念祝賀会に包含され、和やかに行なわれた。

東京支部会総会・懇親会  
十一月一〇日(金)午後六時  
於 学士会館(東京・神田)  
福島支部総会・懇親会  
十一月七日(火)午後六時

◎会員名簿を刊行したこと  
平成一一年一二月刊行、一二月会員宛発送した。

於 杉妻会館  
母校より大西仁会長出席予定

印刷費、発送費等は合計八、八〇九千円。

宮城支部総会・懇親会

尚、次回刊行予定は平成一五年秋、有料、申込制となる見込み。

十一月二八日(金)午後六時  
於 仙台国際ホテル  
母校より、大西仁会長出席予定

◎同窓会会議等の予定  
理事会

以上

九月二九日(金)午後六時

東北大学振興財団、  
研究・教育の助成をはじめ

— 全学同窓会・後援会報告 —

阿 部 純 二

昨年四月一日、文部省から財団法人「東北大学研究教育振興財団」の認可が下りたことは昨年のこの欄で御報告したとおりですが、これを受け、平成一一年度から財団の本来の事業である研究・教育の助成事業がいよいよスタートしました。

昨行第五号第一号から第四号までに定められていますが(詳細は省略します)、平成一一年度は全体で三六件の申請があり、採択は二五件、総助成額は一四、六三九、〇〇〇円(当初予算額は二千万円)でした。今後は、全部で一一巻に及ぶ「東北大学百年史」の刊行助成などの大事業が控えていますの

助成できる事業の範囲は、寄附

で、助成額は次第に増えるものと予想されます。

そこで平成一一年度の募金状況ですが(平一一・一・三二現在)、本年度から卒業後三〇年同窓生及び卒業後四〇年以上同窓生の方々を中心に募金する方針が立てられ、お願いしたところ、多数の応募があり、その他の同窓生、新入生父母等の分も合わせると、総額は一、八七八件、三六、七一四、〇〇〇円に達しました。御厚志まことに有難く、深謝のほかありませ

ん。さらに、財団支援の基盤を強固にするため、後援会の設立発起人となられた約一五〇〇名の方々を中心に財団賛助会が組織され、近く発足の見込みであります。

さて平成一一年度の記念講演会・懇親パーティは、一月二〇日勝山館で開催されました。講演は、青木生子先生(日本女子大学名誉教授)「東北大学と女子学生」、西村純先生(東京大学名誉教授)「大気球で宇宙を探る」の二題でした。懇親パーティは、全学同窓会長である阿部東北大学総長の開会挨拶のあと、和気あいあいと同窓・学内諸氏の交歓が行われました。(昭和30年卒 東北学院大学法学部長・東北大学名誉教授・振興財団監事)

# 支部だより

## 東京支部会

荒 木 幹 仁

平成一一年度の東京支部会総会は、二月二日(金)午後六時から学士会館において行われました。今年、長年にわたって司会を務めてきた佐藤正之事務局長次長(昭32年卒)に代わって尾口光雄理事(昭36年卒)がその任に当たりました。

石原俊東京支部会長(昭12年卒)の挨拶で開会となり、一〇月に開催された法学部五〇周年記念シンポジウムと祝賀会に出席された時の様子についても報告がありました。

引き続き、同氏が議長を務め、庄司昊明事務局長(昭25年卒)からの会務報告の後、池田雄一理事(昭55年卒)の会計報告および村田一弘監事(昭34年卒)の監査報告が拍手で承認され、総会の議事は終了しました。

次の行事に移行するまでの時間を活用し、来賓として本部から出席された小野寺健三郎事務局長から一〇月一五日に開催された同窓会総会に於いて、同窓会学術振

興基金が同窓生の皆様より寄付を募る件が承認されたことの報告と協力方のお願いがありました。

第二部の懇親会は、例年のおとり私(昭37年卒)が司会とみちのくゆかりのBGM係を担当いたしました。

支部単独の開催年のため、昨年には及ばなかったものの、一二〇名余出席の盛会となりました。乾杯のご発声を内田正二郎氏(昭13年卒)にお願いし、開宴となりました。

来賓として出席された樋口陽一名誉教授にご挨拶をいただき、法学部五〇周年も法文学部を起点に

すると七七年(喜寿)に当たるとの比較論が講ぜられ、参会者一同杜の都の歴史の重さを実感いたしました。

出席会員の中で国会で活躍中の佐藤道夫氏(昭30年卒)、月原茂皓氏(昭35年卒)に近況報告をかね、スピーチをお願いし、又、現在、日本全国から注目されている金融監督庁長官日野正晴氏(昭34年卒)にも、スピーチをお願いし、それぞれ国政について、又金融行政の厳しさについて、認識を新たにしました。

宴のなかば、所用のため遅れて参加された来賓である本部会長大西仁法学部長からも、推進中の大学院重点化策等についてスピーチを頂くことができました。

シニア年代に突入した尾口光雄・吉田恒一の両氏(昭36年卒)から、同期の有志が中心となり、二〇〇〇年をスタートとする「いきいきフォーラム二〇一〇」(シニア達がいきいきと生きる新たな社会参画のステージ)の概要と準備進捗状況の説明と参加の呼びかけがあり、会場の関心を集めました。(このフォーラムは本年二月に発足しましたので、別途ニュースとして会報に提供される機会があるかと思っております。)



祝辞をのべられる樋口陽一名誉教授



時間の経過はまさに光陰矢の如く、締めの大役は若手で出席者の一番多かった四七年卒業組に指名したところ、和田義則氏による元気凛刺たる挨拶と気合の入った一本締めでお開きとなりました。

懇親会打ち上げ後、学年ごとの二次会が何組か開催されたとの情報もありましたが、平成一二年度の東京支部会総会は、本部との合同総会開催の年に当たっておりませんので、更に大勢の同窓の皆さんが集い、旧交を温めあう場となることを念じております。

(昭和37年卒・東京支部会理事)

## 北海道支部

竹田 保史

昨秋、小山副学長においていただいて開催された全学の連合同窓会(総会と懇親会)のあと、しばらく行事が絶えていたが、今年に入り、去る三月二四日、ホテルニューオータニ札幌で恒例の春の懇親会を開催。これに先立って理事会および総会が開かれ、役員改選の件ならびに会計報告が原案通り承認され、理事の一部に交替があったが、山島支部長(昭22卒、北大名誉教授)は留任ということになった。

引き続き行われた懇親会には、札幌在住者のほか旭川、釧路、室蘭、苫小牧からの参加もあり、加えて東京から参院議員の佐藤道夫氏(昭30卒、元札幌高検検事長)の特別参加もあって総勢二六名が集う(法学部卒の道内在住者は全部で二百余名いるが、なにぶんにも広大の地ゆえに出席者が少ないのが悩みの種)。

山島支部長の挨拶のあと、安井吉典先輩(昭15卒、元衆院副議長)が立ち「人間としての絆を確かめ、お互いに支え合う同窓会であることを願う」とのメッセージを添えて乾杯!

参院二院クラブの論客として活躍のかたわらテレビ、雑誌、著作などで正に八面六臂の活動を精力的にこなしている佐藤道夫先輩(前出)の卓話のほか、長老のひとりとして著作とゴルフに情熱を燃やしている小納正次先輩(昭16卒、札幌テレビ社友)による定番のスピーチ、久しぶりに出席した人の近況報告などを交えての進行で、出席者こそ少ないが雰囲気は大いに盛り上がる。

特に今回は、例年と趣を変えて立食形式とし、コップ片手に自由に移動して話を交わし、好きなものをとって食べ、疲れたら窓際に

用意した椅子へ座れるようにしたのが功を奏し、わずか二時間という限られたひとときではあったが、終始なごやかな雰囲気のおかげで歓談が交わされた。

最後に、当日の出席者で一番若い青木秀幸君(平5卒、北海道電力)の乾杯で締めくくり。会員各位の健勝を祈念し再会を約して散会。

なお、今回は七月のビール会を予定しているほか、有志によるゴルフコンペ、囲碁の会なども例年どおり行われることになっている。

以上、札幌からの近況報告を終わります。

(昭和61年卒 支部事務局)

## 青森支部

青森支部総会が四月一日、青森市の青森県教育会館で開催された。

本部から樋口陽一名誉教授が来賓として出席され、御挨拶された。

その中で、最近の東北大学の学内情勢や、文部省の大学行政上の問題点などを話して戴いた。

支部役員選出の件では、竹中前支部長が逝去されて空席となっていた支部長に小野隆平氏が選出された。副支部長には古内明郎氏、



幹事に成田慎一氏が指名され和氣 藹藹のうちに終了した。

(支部事務局記)

## 岩手支部の近況

千葉 実

岩手支部は、総勢一三〇名で構成されており、行政・教育機関、地元金融機関、法曹関係のほか、最近では、各民間企業の盛岡支店に勤務となった方々も増え、多様な顔ぶれとなっております。

総会は、毎年七月に欠かすこと

なく開催されておりますが、平成一一年度は早まりまして、昨年六月二三日に盛岡市内の盛岡グランドホテルで開催されました。

当日は、支部長の畑山尚三氏(昭28年卒)を筆頭に、吉田勉氏(昭21年卒)から南幅嘉人氏(平6年卒)に至るまで、各年代層満遍なく三十六名の出席をいただき、大盛況でした。恒例の出席者全員による記念撮影の後、懇親会となりましたが、卒業年次の若い順に一人ひとり、最近の生活ぶり、仕事ぶり等を話していただき、楽しい夜はまたたく間に過ぎていきました。

様々な話に花が咲いたところでありますが、一年に一回の再会を心待ちにしている出席者も多く、年齢の重ねた世代では、お互いの健康や毎日の生活ぶりに、若手の連中はそれぞれの仕事の情報交換が話題となり、宴は大変盛り上がり、過ぎ行く時間も忘れる晩でありました。

年一回の総会ではありますが、年代及び職種を越えた貴重な交流の機会となっております(特に若手にとっては、県内各界で活躍されている要人とお会いできる希少な機会でもある)、固く結ばれた絆は益々強固に成長しているものと確信しております。



総会の最後に、当支部の益々の発展と会員各位の健康を祈念して、再会を誓ったところであります。

(平成3年卒・右手支部事務局)

## 福島支部

当支部は、昭和四二年六月に発足してから、今年で三三年目を迎え、会員数は発足当時の六四名から平成一一年一月現在、事務局が把握しているだけで二二八名を

数え、県内各地で様々な分野において会員が活躍しております。

ここ数年、支部総会は毎月一月開催が恒例となっているのですが、ちなみに過去五年間の総会員数に対する出席率の変遷を見ると、二三・八四%、一三・五二%、一一・七九%、一一・一一%、九・二一%と毎年のように出席者が減少し、昨年は遂に一割を切ってしまいました。

また、出席する会員も固定化の様相を呈しており、幹事一同危機感を募らせている現状にあります。

原因として考えられることは、支部の運営費用の捻出方法が総会参加費に頼っていることからくる参加費の割高感、ボランティア的な事務局の運営のために組織的な活動が困難であること等々、事務局の力不足は否めないのですが、幹事の一人として最近になって感じるものが、二つあります。

一つには、余裕の喪失とでも言う社会の雰囲気は会員の中にも浸食してきているのではないかと言う事です。

深刻な経済不況が長引き、合理化、効率化が社会の至上命題になりつつある中、反面で良い意味での余裕が無くなってきているよう

に感じられます。

仕事や生活、時間等に余裕の無い場合、これに出席費用がかかるとなれば、どうしても出席することに消極的になってしまうものと考ええます。

もう一つは、連帯感の薄れという事です。

社会に余裕がなくなってきていると同時に、人々には利己的な個人主義が蔓延しているように感じられます。

同窓会などの親睦的な集まりは参加したからと言って、特別な利益が個人にもたらされるわけではなく、不参加であっても不利益がある訳でもありません。

あくまで親睦が目的である同窓会を、何かの役に立つか否かを物差しに考えた場合は、なぜ出席の必要があるのか、自分には関係のないもの、と映ってしまうのではないのでしょうか。

このような理由から、出席者が限られていく一方で、欠席のままに同窓会と益々疎遠になっていく会員が増えていく、と言う悪循環に陥っているのではないかと考えるのです。

事務局の力不足を社会のせいにしていくように聞こえたかとも思われますが、毎年総会には本部か



回の総会を開催し、会員相互の交流の場を提供するとともに、支部員名簿を作成し、把握している会員全員への配布を実施しておりますが、以上のような支部総会への出席率低下の現状を踏まえ、事務局としては、①総会の毎年開催の継続、②少しでも多くの会員の総会への出席を実現するために会費を低く抑えること、の二つを最重点課題と考え、名簿の簡略化や、総会前後二回通知していた全会員への通知を一回にし、経費を節減する等、同窓会運営の見直しを行っております。

今年の総会は、今のところ一月七日(火)に開催し、法学部長の大西教授をご来賓としてお迎えする予定でおりますが、とにもかくにも一人でも多くの会員の出席を願うばかりです。

最後に、昨年の一二月二日開催の総会に、御多忙中にもかかわらず、御出席をいただいた吉田正志教授、名簿作成や総会開催にあたり、お世話になった小野寺事務局長ほか同窓会本部の皆様、さらに県内各地より参集された会員の方々にお礼を申し上げます。支部報告と致します。

(昭和60年卒・支部事務局担当)

ら法学部の先生をお招きし、会員同士が年齢や職務を越えて直に盆を交えながら語り合い、言葉では言い表し難い一体感を味わうことができるという貴重な機会であることを、多く会員が実感できないままであることが残念でならない。敢えて愚痴を述べさせてもらいました。

従来の支部活動としては、年一

## 東海支部同窓会報

松田 太源

平成一二年四月二六日午後六時から、例年、同窓会ではお世話になつてゐる鳥久において、東北大学法学部東海支部同窓会が盛大に開催された。

今年の出席者は、残念ながら例年に比べ若干少なく、北村利弥先輩(昭9年卒)を筆頭に一番の若手は池田貴裕君(平9年卒)までの合計二〇名と、経済学部から佐々木仁先輩(昭28年卒)、佐々木建先輩(昭34年卒)、加藤孝之先輩(昭43年卒)の三名の合計二三名であつた。

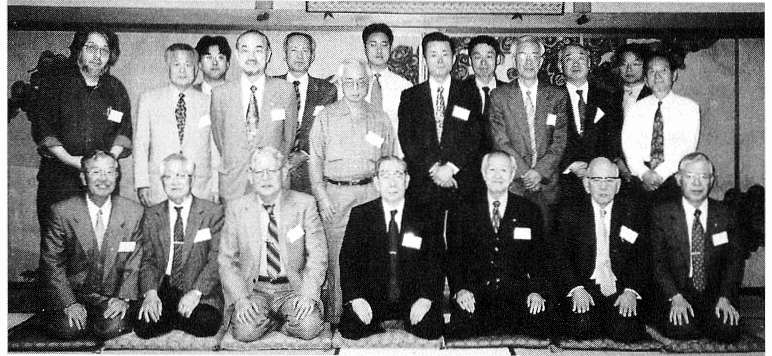
さて、総会は、幹事の進藤裕史先輩(昭58年卒)が自ら司会進行役を務めながら会計報告をし、北村先輩の挨拶、佐々木仁先輩の挨拶と続き、出席者全員での写真撮影の後、高橋正藏先輩(昭17年卒)の御発声による乾杯により宴会となつた。

お酒が入ると、みなさん急に賑やかになり、年輩の方々も若手も入り乱れてあちらこちらで談笑が聞こえてきた。やはり、この同窓会は年に一度の行事であり、出席者の方々は毎年楽しみにされていようである。特に、毎年出席さ

れている方が欠席だったりすると、会えるのを楽しみにして来たのに残念だという話があちらこちらで出たりしていた。特に年輩の方々とっては、同窓会に出席することでお互い元気な姿をみながら喜び合うという意味もあるのである。

私自身も、当時の同級生が二人も出席し、久しぶりに懐かしく旧交を温めた。我々の年代はこれから三〇歳前半から三〇歳中盤にさしかかろうとしている年頃であり、それぞれ勤める企業の中で一線級としてバリバリ仕事をしている連中であるため、二〇歳前後の大学時代と比べてみならず、つかり貫禄がついていた。

今年、ちよつとした珍事があつた。当同窓会には、北村先輩をはじめ名古屋弁護士会の中にもいわゆる大先生が数名おられるが、我々の同窓会とちよつど同じ時間、別の部屋でたまたま会合をしていた弁護士十名弱が聞きつけ、途中から先輩方のところへ挨拶にみえて、いつの間にかそのまま一緒に宴会になつてしまつて、大いに盛り上がることとなつた。そのため、例年であれば、出席者のみなさんに一人ずつ自己紹介及び近況報告をして頂いていたの



ば参加下さいますようお願い致します。  
(平成4年卒・幹事)

## 大阪支部同窓会

三浦 和博

平成二二年四月一四日午後六時より、本年度の大阪支部総会が行われました。

最近二年間は、帝国ホテル大阪で開催していましたが、今年はガラツと趣を変え、大阪の伝統的な歓楽街である十三の中華料理店「天津閣」で行われました。

当初、歓楽街の中にあることで、参加者がとまどうのではないかという心配もありましたが、参加者からは、「親しみやすい」などと好評でした。

この店は大錦支部長が良くご存知のお店であり、途中でサービス料理が出されたりして、美味しい中華料理を堪能できました。

今回は、大西法学部長の代理として中西正教授が来賓としてお越しくださり、東北大学法学部が大胆な大学改革に取り組んでいる現状についてのお話を大変興味深く伺いました。

余談ですが、中西教授は、私と司法修習同期(38期)であり、とも

に研修所の寮で生活をしていましたので、私にとっては大変懐かしい再会でもありました。

その後、各参加者がそれぞれ近況などを報告し、なごやかな雰囲気の中で時間はあっという間に過ぎていきました。

今回は、昭和二五年卒業の小林勝さんを筆頭に、平成一一年三月に卒業したばかりの永井謙次さんも出席され、大変バラエティに富んだ楽しい同窓会となりました。

最後は、恒例となった元応援団長の山本敏信さんのエールにより、参加者全員で「青葉もゆる」をうたい、名残を惜しみながら、閉会致しました。

ご多忙にもかかわらず、ご参加いただいた中西教授初め、大阪支部の皆様、本当にありがとうございます。

最後に、大錦支部長には毎年、会場の設定、総会の参加者の出欠の確認その他の事務を全面的にさせていただいており、大阪支部総会を三年連続して開催することができたことについては、大錦支部長の大きなご尽力があったことをご報告するとともに、御礼を申し上げます。

(昭和58年卒・理事)

## 同期会等だより

昭和二九年卒業、  
卒業四五周年記念  
同期会

朝倉 亮

「知足の集い」に三七名参加  
昭和二五年入学者の卒業四五周年同期会は、平成一一年五月二九日午後五時、同期生三七名参会のもと、仙台市上杉山通の「勝山館」で開催された。

平成一一年は、私達同期の入学五〇年目にあたる。私達の入学時は国内外情勢および学制改革の転換期であった。入学直後学内にイールズ事件が発生した。その後の学生運動に大きな波紋を投ずる大事件であった。そして、六月には朝鮮動乱が勃発し一衣帯水の隣国は再び戦火に包まれた。

振り返ると、私達は殆どが満州事変の年(昭和六年)前後に生まれ、昭和の動乱期に少年時代を送り、旧制中学二年前後に敗戦を迎えておる。そして世相は軍国主義から急転民主平和主義へ。労働運動は一時革命前夜を思わせるものがあった。衣食さえも不十分で勉

であるが、今年はそれどころでなく気が付いたらお開きの時間がせまっております。最後は、出席者全員で「青葉もゆる」を大合唱し、本年度の同窓会はお開きとなった。今年も、若干出席者が少なかつたが、また来年にみなさんの元気な姿を拝見できることを期待して来年の同窓会を楽しみにしたいと思います。これまで参加されていなかった方々も是非お時間があれ



学にとってはいわば最悪の環境の中で育ったわけである。そして就職難。世に出てからは高度成長の現業第一線で汗に塗れた。  
しかし、そのような苛酷な時代背景のなかでも、私達世代は粘り強く生きて、なお不思議と寛容の精神に富む世代でもある。

今回の記念同期会は東京幹事会（佐々城・笠原・小林等・中村君等）代表梅沢君から強い希望があつてスタートした。勝山館勤務の熊谷君が呼び掛け、水谷・山口（正）・吉田・河内君等の協力を得

て、幾回と意思疎通を重ね、結果的に適材適所で働き、当日まで漕ぎ着けていった（その結果一時は参加申込数も四二名まで数えた）。最終的に三七名の参加となつたが、卒業時約百五〇名の名簿からみれば、古希に近い同期としては多数参集していただいたものと考える。やはり一人一人が時代背景を振り返り、他同期生の分までもという心情で集い来てくれたからに他ならない。とくに遠方の広島大学の山本君、愛知の藤山君（前東海銀行）、札幌の安念君（現北海道電力）等には感謝したい。都合があつて参加できなかった学友からは、吉村君（元仙台地方検察庁検事正）等から四四名もの消息・メッセージが届けられた。

仙台の五月を象徴するものは青葉の山並みと櫻並木である。「青葉燃ゆる」学生歌どおり杜の都はさみどり一色につつまれる。

当日、並木の枝葉には爽やかな風がそよぎ、記念会に相応しい五月晴れとなつた。

世話人は二手に分かれ、その一班はメインイベントに先行して五〇年前の学舎を案内することになった。名付けて「ゆかりの学び舎」ツアー。案内は河内・吉田の両君。一四時三〇分参加有志仙台

駅に集合。遠来は長内・安念・及川（清）・及川（昭吾）・後藤（不）・斎藤（莊）・佐々木（陽）・千田（秀）・山本の面々。四五年前一別以来の仲も多い。しかし、「やあー」と手をあげれば皆年月を越えて回想のタイムトンネルに入る。タクシーに分乗して片平丁・向山（法学・経済学部生は前期二年、旧制宮城県女子専門学校跡地に通学した）・青葉城・青葉山キャンパスへ。「若き日の春秋よ」。想い出の場所に降りては徒歩で懐かしの追憶にひたつた。

原・佐々木・杉谷・小泉・及川（清）・千田・安念・山本・藤山・笠原等諸氏と、後藤（一）（現仙台簡易裁判所長）・設楽・仁科・星・山崎・渡辺（英）・日下君等在仙郷士諸士等が綺羅星のごとく三段に佇立するという見事な構図となつた。小野弁護士と油川君東北学院大は所用のため間に合わなかつた。

本会場・勝山館には一六時過ぎから同期生が参集し、六F会場「スカレットプラザ」脇の広いソファに若葉の光を眺めながら談笑の花を咲かせた。最後に、当時の演劇部の優婉清楚なる容色そのまま、佐藤（旧姓吉田）瑩子さんがこやかに現れた。五〇年前、共学

記念会本会は一七時一五分から開催となり、山口君の司会で一同故人となつた二三名の学友に黙祷を捧げた。一人一人の面影を偲び、名を呼び、心から御冥福を祈る。（合掌）

など経験のなかつた過半のシリアスな一団にとって、旧姓吉田・石川・河合等三人の女子学生は、どこか遠い国から舞い降りた白鳥のような存在であつた。記念写真は結果的に、佐藤さんと最年長の長内大兄を中心にして、両斎藤・及川・小林・後藤（不）・阿部等領袖が左右に流れ、背後には、遠来の瀬戸・萱場・梅沢・佐々城・笹

開会挨拶は先ず代表河内君。「ゆかりの学舎」の状況等紹介し、学部内外の今昔を話し歓迎の辞を述べる。東京を代表して仙台二高出身の笠原君が学都の町並みの隔世の趣を語り、長内氏（昭和二十七年、手作りの模擬国会の総理大臣、当時の市民会館大ホールに詰め駆け満員の聴衆は忘れがたい）が同期生の人間性を讃え乾杯。以下及川（前国民生活センター理事長）、佐藤、斎藤（右手銀行現頭取）三君の祝辞と続いた。会場の筋向かいに立つ明善寮歌のメロディが流れる中、記念会は盛り上がり、瞬く間に二時間半は経過した。会場

の華やかなワインカラーの色彩に包まれながらも、やがてひとときの終宴を迎える。熊谷君からお礼の挨拶の後、最期に小野兄が同期生全員の今後の健康を祝って乾杯し記念会総会の幕を閉じた。

名残は尽きず二次会へ。会場から木陰を伝い清談しつつ歩いて区分町へ。「新樹」という店に参集した。カラオケは日下君の美声で始まり、笠原君の「千曲川」、小野兄の「北帰行」、長内大兄の「津軽山唄」、梅沢君の「君こそわが命」、そして「青葉城恋歌」の合唱とはてなく続いた。

その記念会からはや一年が経つ。そして新世紀は近い。インターネットの情報革命、遺伝子の解明から、宇宙の把握へと文明は急速に進展して止まることを知らない。しかし、人の心の問題もまた古来から永遠の課題として常に提示され続けて終わりはない。文明の急激な変貌に際し、同期生一同、時代のウオッチャーとしてのみならず、二十世紀の証人として、能うかぎりにおいて新世紀を担う後世に対し、幾分なりともアドバイスできうればと考える昨今である。母校東北大学法学部の前進を祈りたい。

(記念同期会世話人)

## 五〇回に迫った

### 山王会ゴルフ

高橋 亨

去る四月七日(金)、上野原(山梨)のメイブルポイントGCに集まった同期生の面々一八名。第四八回山王会ゴルフコンペである。昭和三〇年入学でサンオウをもじり、また三神峯の丘での教養部時代を偲び、同期会を山王会と名付けて何年になろうか。この日、鷲尾貫兮(元三井銀行)がグロス八二(ハンデ七)で二度目の優勝を果たした。例によって、納会での話は尽きず二次会は八王子下車となる。八名が参加し、大いに飲み、かつ大いにダバる。

このコンペ、二六年前の昭和四九年六月一五日(土)富士レイクサイドで始まった。大野康夫(山一証券)、河村康夫(新日鉄)、小林樹(日本教育テレビ)、佐々木正東京電力)、山口暢彦(富士電機製造)、佐藤隆太郎(日産火災海上、現社長)、熊谷桂五(三井物産)、高橋亨(三菱商事)が参加した。当時は皆まだ三〇才台、高度成長の時代、仕事に限らず、事にあたるに熱意があった。以来、毎年欠かさず、ほぼ年二回のペースで今日まで来た。その間、実質的に常任



仙台でも、四回行った。第三回西仙台CC、第一〇回仙台CC、第二九・四二回泉パークタウンGCである。第四二回は、三〇名の参加で、山王会最高の参加者数を記録した。

四八回のうち、初優勝者は二七名。一回は小倉素夫(元三菱電機)、作田克之(元富士電機製造)、水越実(元三菱金属)ら一二名。二回は日野正晴(元検事、現在金融監督庁長官)、間庭昭(元神戸製鋼)、高木忠(元日興証券)、小橋孜(富国生命)ら一〇名。三回が山口暢彦、大錦義昭(弁護士)、鞍谷東夫(元日本興業銀行)、鈴木清人(元住友生命)の四名。最多優勝四回が高橋亨である。

幹事の役割を果たし続けた大野康夫に依るところが大きい。週末にゴルフ場を確保するのが難しい時代、予約、通知、出欠確認等々尽力してくれたのが大野である。平成八年、みんなが還暦を迎えつつあった第四〇回から開催日を土曜日から金曜日に変えた。以後予約容易・費用安で、参加者も増えて常時二〇名を超えている。

平均参加者は二二・六名。一〇回全回参加者は三名。熊谷桂五、鈴木清人、高橋亨である。九回参加者は内久根孝一(元住友生命)、下山博造(弁護士)、瀬戸賢(安田信託銀行)、松田喜重(元明治乳業)、鷲尾貫兮の五名。八回参加者は小笠原敏弘(元安田信託銀行)、持地武彦(元住友海上火災)、高木忠、木村祐造(中央競馬会)の四名。遠隔地からの参加では、大阪から安



井宏明(元武田薬品)四回、大錦義昭二回。福島から石黒良雄(弁護士)五回。岩手から菅野俊吾(陸前高田市長)の参加も特筆される。

最近一〇回分、延べ二二六名のスコアは、クロス平均一〇・一・五。ハンデ平均二三・七、ネット平均八七・八。ベストクロスは、七七から八六。ベストグロスの平均は八二・一。優勝者のネット平均は七五・六。コンペとしては、まずまずのレベルか。

最近一〇回中五回以上参加者二三名のクロス平均のベスト5を作ってみた。一位岩崎弘(元協栄生命)／八六・四、二位鈴木清人／八九・二、三位鞍谷東夫／八九・八、四位鷺尾貫兮／九〇・七、五位木村祐造／九一・三となった。山王会の名手達である。

山王会の活動はゴルフだけではなく。ここに略記しておきたい。

昭和五七年七月からは、雑学会を始めている。お互いに自分の進んだ道で得たものをレポートして勉強し合う会である。リポーターには、石垣泰司(外務省、現在フィナンランド大使)、保原喜志夫(北大教授)、木村祐造、小林樹(当時日本CATV)、塚原喜朗(行政管理庁)、佐々木正、長谷川徳之輔(建設省、現在明海大教授)ほか。会

は山王会に統合して、二〇回を超えた。近年は雑学から懇親に性格を変えつつある。

山王会は、最近、囲碁会も始めた。栗村元郎(元住友商事)が幹事役。毎月第四土曜午後。場所は東京駅八重洲口のいずみ囲碁サロン。指南役は、内久根孝一(六段)である。囲碁には目のない連中が目下一四名、目の色変えて目の数を争っている。大森昭吾(元常陽銀行)は、会の都度はるばる水戸から馳せ参じている。(敬称略)

(昭和34年卒)

## 『かまくら法悦の 二〇余年』

秋 山 高

恩師、中川善之助先生ご夫妻を思慕して、お互いに日頃の健安を確かめ、あすの活力にしよう、二三年の間(昭五二)ずっと続けてきた「沖和会」という、同窓の集いがあります。いまは、八〇名中、出席は四〇名ほどですが、なお第一線で活躍している方もかなりおられて、いつもとても和やかな交歓風景です。

昭和二二年、終戦で仙台に戻ってきた法学部の先輩たちが、大空襲により、全く住むところもない



沖和会、鎌倉好々亭にて 平成11年4月

寮でした。その後も、この会は初代の寮生(昭二卒)から年次も途切れることなく、いま五八才の昭三九卒までの人が主なメンバーになっております。

先生はご存命中、いつもずっと人格陶冶の場でもあると認じておられたようでした。

昭和五〇年、先生が仙台に向かう上野の駅頭で、不帰の客となられた後、三周忌(昭五二)の頃、寮生の誰からともなく、師慕の念が高じて、鎌倉での会合が始まりました。

蔵さん、山島さん(昭二卒)、阿部さん(昭二卒)、小野さん、笠井さん(昭三卒)、大林さん(昭三卒)らのご尽力で、青葉繁れる頃に、ことしも、又来年もとつづいてきました。近年はご縁の深い法律相談所や芝蘭会の女性の方もウエルカム参加いただいで、華やいだ空気がええ漂います。

概ね四月第三土曜日、北鎌倉でと決まっております。ことしは四月一五日(土)です。正午集合、名利東慶寺にて先生の墓参をすませ、早緑亭う会席亭で半日を過ごすのが定番です。

会のはじめには、在りし日のお声を拝聴しています。

昭三六の退官記念講義、昭四三

窮状にあるのを見かねて先生が、私財も投じて開いたのがこの沖和

の講書始「家族史の研究」や昭四九年文化の日にNHKで放送された「民謡の旅」などです。

酒がすすんだ頃には、政・官・学・法曹・業など各界の方からトピックスやエピソードを伺い、それに友人の消息やユーモラスな心境などのスピーチもあります。

遺影の恩師も「ウン、そうか。そうか。」と微笑しているかのようです。

札幌、釧路、大阪、岡山からの人達も常連です。散会後は、さらに鎌倉、横浜、東京へと発展するのはいつものようです。酒に、歌に、旅に、仙台に、思いも様々で元氣のでてくる春宵のひとつときです。

六〇才前後に先生が著わされた随筆も話題になって、図らずも先生の道標にもなります。「赤いベレー」「北向きの部屋」「民法風土記」「夫婦親子」「家族法読本」「中川善之助の人と学問」などです。

こうして、卒業年次の異なるメンバーが各地から、そして二〇年以上もつづく会合です。それぞれの学生時代と先師とを縁とした「法業」とでもいうのでしょうか。

東慶寺には「身分法学の父であり、新民法の母であり、学生を限りなく愛した先生を景慕して」(昭

五一建立)の碑があります。

会ではこの間、既に鬼録の方もおられ寂しいことです。しかし、日脚が伸びて草木萌える春は又、こうして師や新旧の友と邂逅するかけがえのない自分達の青春ともなっているのでしょうか。学縁遠遊の趣があります。

(二月二十九日記  
(昭和36年卒)

### 40 J 卒後三〇周年 同窓会

佐々木 信義

昭和四〇年法学部入学生の卒業は四四年から四八年までにわたるが、入試から解放され川内のキャンパスに集い「学生歌」を覚えた頃の仲間が、やはり同窓・同期と呼べよう。四四年(一九六九年)に大半が卒業したので、一九九九年が卒後三〇周年に当たる。仲間は全国に散らばっているが、五〇歳を過ぎ仙台に戻った方や転勤で仙台に来た方もあり、現在仙台在住者が十数人おり、当時の法学部定員一五〇名の一割を数える。数からいえば東京近辺在住者が圧倒的に多いが、声掛けしてスツと集まりやすい仙台在住者が、一昨年、工藤順一君の仙台転勤を機に集



まって飲んだ際、43 Jが卒後三〇周年同窓会をやるらしいと話が出た。我々もやらねばと話が弾んだが、それはそれ、飲んだ時の話のままに一年が過ぎた。  
一一年六月末に同窓会報が送られてきて「ガッン」、なんと39 J

の同期会が麗々しく嵐田先輩の名文で載っているではないか。こりややつぱりやらんと、と急遽在仙有志が集まり、一〇月九日(土)の開会と案内係・会場係・ゴルフ担当などと当日までのスケジュールを組み立て行動に走った。あつという間に三ヶ月が過ぎ、当日を迎えた。

一九九九年一〇月九日(土)午後六時、会場は仙台国際ホテル。受付を五時過ぎに始めると懐かしい顔が次々に集まってきた。街ですれちがっても分らないだろうに、会場ではすぐに「ああ彼だ」と思い出すのも不思議なものである。

時は世紀末、世はミレニウム対策とかで大騒ぎしており、今回の参加者は残念ながら三三名であった。

清藤(旧姓高橋)芳子さんが昔ながらの童女顔(失礼)でやわらかに司会する中で会は始まった。発起人を代表して佐々木が挨拶、乾杯は最遠隔地福岡から駆け付けた飯島宏君、服藤名誉教授にご挨拶いただき、参加者紹介、懇親と進んでいった。近況スピーチの頃は大いに盛り上がりつつあり、誰が何を話したのかトンと記憶にない。ただ懐かしさだけで時間が過ぎて



いったようだ(各位には大変失礼しました)。会場は三〇年の歴史を刻む話の輪があちこちに出来、今なお青春の雰囲気は充ち充ちていた。一次会の時間が過ぎ、二次会はホテル内のバーを借り切つての懇談が深夜まで続いていた。

翌一〇日(日)は、赤松実君が世話役で仙台カントリークラブ青葉山コースで八名が参加してのゴルフコンペに興じた。優勝はモチ、赤松君であった。

何分、40J出身者の就職先は、当時の高度経済成長期を反映して民間企業が多かつたようで、各位も転々と転勤で動いており集まる機会も少なく、これといった纏まつた会を催したのは今回が初めてと言つていくらい、互いに「ご無沙汰であつたように思う。

バブル経済の渦中をミドルマネージャーとして時代を生き、今は不況の中である者は企業再生に役員として苦勞し、ある者はライオンから外れ自分の生き方を模索しつつも東北大出身者としての真摯な姿勢が皆の白く薄くなった髪に滲んでいた。ああ東北大、ああ東北大。

「石ひとつ 坂をくだるがごとくにも 我けふの日に到り着きたり」と啄木は詠んだが、啄木の倍

の年齢を重ねてなお、到り着く所を探す我ら40Jに幸あれと祈る。(昭和44年卒・幹事)

## 未だ、酒量衰えず

— 41J卒業30年

記念同窓会 —

澤田 淳

「確か、君とは卒業以来会つていないよな」顔は学生時代とまったく変わらないが、お頭の方の變化は相当なものだな」「おまえ、最近すつかり時の人になつたみたいだな」「なんだ、お前、市長選に立候補したんだつて。もつと前に話を聞いていれば……」

各々酒が回るにつれ口が滑らかに、宴会場のいたる所で、思い思いに相手を掴まえては、三、四人ずつ車座になり、それぞれに会話が始まり、あちこちで大きな笑い声が聞こえてくる。

平成一二年四月二二日、私たち昭和四一年に入學した仲間の多くが卒業してから三〇年になつたのを記念して、一〇年目の箱根、二〇年目の松島に続いて、秋保温泉の佐助で、十年振りに41J全体の同窓会が持たれた。

飯倉穰くんの開会挨拶のあと、恩師代表の藤田宙靖教授から「諸



をたくさん吞まれたお客様は珍しい」とのこと。大方の人間は、学生時代から「人数プラス一升」の日本酒で酒盛りばかりしていたのだが、五〇歳台前半にして、未だ酒量衰えず、といったところだろうか。

その参加者、赤澤(安藤)春夫、秋田谷博、池田憲人、飯倉穰、稲田英明、犬飼健郎、遠藤太嘉男、音部昌宏、小野寺勇、柿崎喜世樹、川口雄、川崎茂、小出恭、栗本浩、江目昭、斎藤脩、里村育施、澤田淳、清野智、高田康昭、高橋三郎、高松盛太、田原勝成、堤芳夫、久道虎夫、廣澤和登、藤沢智、星本文、松浦洋、松永勝弘、村瀬(川島)久子、吉田正志の面々、総勢三二名。

参加者の何人かからの「これから一〇年後に会うのでは、誰かが欠けてしまふかもしれないから、今後、公式の同窓会は五年毎にしよう」との発議で、次回の「41J三五周年記念同窓会」の開催は平成一七年に決定した。

(昭和45年卒)

君は東北大学に赴任して初めて受け持った学生だったので、顔と名前は一致しなかったが、試験の答案内容はよく覚えてる」とのユーモアあふれる挨拶を頂戴した。そして、里村育施くんの乾杯で宴席をスタート。このあとは、メンバー同士入り乱れて、仙台時代の昔話から、国に行く末を憂う話、行政、金融の少し生臭い話などが飛び交うことになる。差し入れの吟醸酒はすべて飲み干し、限らない酒の追加注文。翌朝、旅館の支配人曰く、「こんなにお酒

# 四七法プラマイ会

## 開催さる!

和田 義 則

年に二回開催の「四七法プラマイ会」定例会は、去る五月一九日、くだんの三菱地所株「高輪倶楽部」にて開催されました。今回の参加者は一七名。北は釧路から南は沖縄まで、西は広島から会員が揃いました。時代を反映して、会場にはいつもの馬鹿チョンカメラの他にデジカメが持ち込まれました。開催の連絡は電子メールが主体ですし、記念写真も一昔前とは様変わりです。これであれば、不参加の会員も地元で会の様子が手に取るように分かり便利です。

当日は、ひとしきりお腹を満たした後で、お互い近況の分かち合いを行います。スピーチの最中に、鋭い質問の矢が飛んだりして、学生時代とちつとも変わらないなあと思ったり、人が変わったようだなあと思ったり、はるか昔に心は帰ります。一七人が挨拶をしたらもう時間です。今回はエール要員が欠けたため、記念写真を撮り静かにお開きとなりました。品川の



高台を三々五々に降り、現代社会にまた復帰です。

このプラマイ会も年々歳々、参加者が多くなることでしょう。行く行くはホームページを作ってみようと幹事の夢は拡がります。次回は一月、また、元気で相見えようではないかと別れました。

ちなみに今回の参加者は、登録順に、宇野哲人・高橋京太・西尾真・横尾 正・佐々木康忠・本間秀行・山城博美・島田武幸・山内

一正・石川 正・杉山 昇・小川 耕一・高橋孝安・有川 博・霞 広行・飛田照幸・和田義則の一七名でありました。

\*Eメールアドレス(自宅)...

BZY14745@nifty.ne.jp

(昭和47年卒・日産船舶株)



平成13年度会報(28号)の原稿を募集いたします。卒年をとわず、適宜事務局にお寄せ願います(平成13年2月第1次締め切り)。